

その言葉、大丈夫？

岐阜市立長森中学校 3年
尾下咲愛(おした さら)

みなさんは、友達と関わる時、自分や周りの仲間のことをどのように捉えていますか。間違っても、「あの子は自分より下」だとか「あの子よりもこの子の方が上」などといったことは思っていないと思います。でも、世間には、いやもっともっと身近な、私たち中高生の中で、見直してほしい言葉があります。

「あの子は陰キャ、陽キャ」「あっちのグループは一軍、二軍……」こんな言葉を使ったことはありませんか。使ったことがある人、とても多いと思います。もちろん、私も使ったことがあるし、周りの友達の間でもよく使われている言葉です。たいていは、仲間内でふざけて使い合っているものなのですが、ある時、あまり関わりのない子に対して、「あの子たちは陽キャだから関わりにくいな。」と言っている子を目にしました。その時私は初めて「陰キャ、陽キャの区別って何だろう」と思いました。それは、言われている子たちと私が全く違う捉え方で関わっていたからです。

「陰キャ、陽キャ」の区別は、私たち一人ひとりの中であって、それぞれがずれているんだと思います。そんな不安定な言葉、不安定な基準で人の価値を決めるって、ちょっと怖いことだと思いませんか。

さて、そんな中私は面白いことに気がつきました。「陰キャ、陽キャ。一軍、二軍。」と言っている人の中で、自分のことを「陽キャで一軍。」と言っている人は誰一人いないということです。かといって、全員が自分のことを「陰キャ」と思っているかという、そうではありません。相手のことをランク付けする割に、自分のことは棚に上げてしまう……。そんなことを、担任の先生との会話で話していました。その時、先生はこの発見に対して、「なんだか、日本人の国民性を感じるよね。人のことは気にするのに、自分のことは棚に上げちゃう感じ……。」と言い、続けて、「陰キャとか陽キャとか、一軍とか二軍とかといったものがあるとは信じてはなりません。一人一人の人間がいる、ただそれだけのことですから。」と冗談っぽく言っていました。少しして、私は気がつきました。それは、国語の授業で読んでいた『握手』という物語の一節をもじったものだったのです。

物語に登場するルロイ修道士は、戦勝国のアメリカ人でありながら、敗戦国の日本人の子どもたちに無償の愛を注いでいました。そんな彼の姿を、私は物語上の人物の言葉に過ぎないと思っていました。しかし、改めて考えてみるとルロイ修道士のこの考え方は、私の疑問を晴らしてくれるものだったのです。

現代の社会では、国と国との争いが絶えず続いています。また、お互いのことをわかり合えず傷つけあってしまうことは、それ以上の頻度で起こっているのです。今回私が考えを巡らせてきた言葉は、ちっぽけな言葉なのかもしれませんが、そのちっぽけな言葉一つ一つで、周りの人のことを幸せにも不幸せにもする力があるということ。そして、その言葉一つ一つの発信者は、紛れもなく私であり、みなさんであるということ、私は実感することができました。

みなさん、自分たちの身の回りにあふれる言葉の使い方、友達との関わり方、ちょっとだけ見つめ直して、より充実した生活を送ってみませんか。